

平成24年8月2日(木)
於・日本プレスセンター

◆ 「夏休みのシンポジウム」とは？

読売テクノ・フォーラム「夏休みのシンポジウム」は、読売新聞社が主催となり、「理系女子が、世界を元気にする」と題した内容で、主に理系進学を志す女子中高生等を対象として開催されたフォーラムです。約100名の女子中高生と、その父母ら計250人が参加しました。



講演「未来のウイルスとたたかう」
進藤 奈邦子 氏 (WHOチームリーダー)

現在、WHO(世界保健機関)でインフルエンザなどの呼吸器系疾患のチームリーダーを務めており、世界中の専門家と協力して治療法を探したり、最新の情報を収集し世界の保健衛生の方針を立てたりしています。

中学・高校時代は理系科目が苦手だったのですが、建築家になりたくて勉強し、最終的には医師になりました。怠けずに頑張れば進路を変えても道は開けるものです。私もこれまで多くの壁にぶつかってきましたが、家族、友人、同僚などの支えがあって、国際舞台に立つことができている。皆さんも、夢を語り、共有できる人をたくさん作って、人生を豊かにしてほしいと思います。

講演「科学の楽しさを伝えたい」
内田 麻理香 氏 (サイエンスライター)

現在、好きな科学と苦手な家事を組み合わせ、家庭の中の科学を探って解説するウェブサイト「家庭科学総合研究所(カソウケン)」を運営するなど、サイエンスコミュニケーターとして活動しています。

サイエンスコミュニケーションは、専門家ではない一般市民に向けて、科学技術について伝えたり、対話したりすることによって、日々の暮らしで、科学技術を利用していることに気づいてもらうことです。文芸作品や映画、哲学などに触れて私たちの視点が変わるように、「新しい眼鏡」になり得るサイエンスを、身近な所から伝えていきたいと思っています。

パネルディスカッション「科学の知恵で、生活を豊かに」

パネリスト 池田 智子 氏 (資生堂 副主任研究員) / 佐野 祐子 氏 (清水建設 設計長)
本多 るみ 氏 (自然教育アドバイザー)
コーディネーター 滝田 恭子 氏 (読売新聞東京本社科学部)

Q:いつから理系を志したのですか？

A:数学、化学に興味があった(池田) 自然豊かな所で育ち、自然や生き物が大好きだった(本多)

Q:仕事でやりがいを感じる時はいつですか？

A:化粧品を開発する際、原料の配合を変えて、成分の不均一な状態が解消できた時など(池田)
チームで難題を乗り越えた時、建物を使う人たちの喜んでる姿を目にした時(佐野)

Q:女性で良かったことは何ですか？

A:化粧品は女性が使うので、利用者の立場からどう感じるかがわかりやすい(池田)
学校や老人福祉施設など、女性の視点で設計してほしいと指名され、素材やその色、かどに丸みをつける配慮など、評価してもらっている(佐野)

Q:最後にメッセージをお願いします。

A:細やかな配慮など『女性』を生かせる視点はある。自分だからできることを見つけてほしい(本多)
興味から色々な可能性は伸びる。好きなことを見つけて有意義な生活を送ってもらいたい(佐野)

高専機構
も参加！

◆ 高専をPRしました！

参加者の女子中高生全員に「高専ナビ」と「キラキラ高専ガール」を配付し、希望者には関東近郊の高専の学校案内を配付しました。特に「キラキラ高専ガール」は、女子中高生だけでなく、幅広い年齢層の方が手にとっていました。また、会場の後方に高専をPRするポスターを掲示し、『高専』がどのような教育機関か知らない参加者に対して、ポスターを使って説明を行いました。



会場の写真